

第二期 第一〇二号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 01. 10 定有堂書店 発行

笈の定有

愚直に理想を語り続ける―宇沢弘文の後半生

岩田直樹

「本のある場所」日記 二〇二四年十二月

南陀楼綾繁

見えるものと見えないもの日記

鳥居 貴彦

今日のごび

白井 明大

ジチコウミンカン体験記

萩原 俊郎

Stop, Look, Listen (To Your Heart)

高木 善祥

本を作る側から (22)

村瀬 謙介

書くことなんかない

古賀 啓三

「団地のふたり」に憧れる

山下 篤美

汽水のほとりから (45)

小原 修治

スネーク・セルパン・サーペント

ムラカミヒロミ

内坪井町日記 (8)

齊藤 仁昭

とっとり、ひとり、本を作る

三浦 永理

夏肉と骨

あきの素生

ご案内・編集後記

ドラマメリア

奈良 敏行

笈の定有

奈良 敏行

(定有堂 主人)



十八人の書店人の声を集め編集した本がある。『本屋という仕事』という本だ。

近ごろ本屋についての本を「笈」の中から取りだして読み始めている。この本は「本屋は焚き火である」という不思議なテーマで編集されている。「焚き火」という見立ては名状しがたい心の根本にうごめく何者かだ。本屋にこの「焚き火」を発見したのはこの本の編者だが、読み返してみると本当にこの「焚き火」が見えているのは編者だけではないかと思えた。この問いを投げかけて編者は言う。

《この本で目指したいと考えたのは、本屋を入口にして私たちが生きる世界に、新しい価値をつけかわえるための道標を提示することです。》

この宣言は人を選ぶかもしれない。「本屋を入口」にして新しい価値を見出すという強い確信の共有を求めるからだ。しかもそこには「焚き火」があるという。「焚き火」が何かという問いに答えるにはもっと時間が必要だ。逆行してし

か見えないものもある。じつは問いの答えが大事なのでなく、この「問い」がなぜ問われるかが大事なのだ。

この本の著者として招かれた本屋の一人、宇田智子さんは「紙に書けば実際の方向が失われる」というオーストラリアの先住民アボリジニの長老の言葉を紹介する。文脈はもちろん違うのだが、「焚き火」も書き尽くされるものでなく、語りの中にしかないという気がする。だから「焚き火」を訪ねる編者の旅はきつと終わらない。

編者のいう焚き火はこんなところにもあった。『シユイクスピア・アンド・カンパニイ書店』だ。カナダ人のジエレミー・アーサーという元新聞記者が流れ者となって二十八歳の時にここへたどり着く。それはパリの本屋で店主のジョージは八十六歳だった。この本は二〇〇〇年初頭から数ヶ月にわたり滞在した「ジョージの本屋」の記録だ。

本屋の入口には「見知らぬ人に冷たくするな、変装した天使かもしれないから」と刻んである。パリの左岸にある、食事付きのただで泊まれる本屋なのだ。裏口から入ると、ジョージの蔵書が一万冊以上、所狭しと積み上げられ、本の山の隙間には、あちこち数えれば十三台のベッドがある。無料滞在の条件は大きく三つある。一つはこの蔵書からひと月一冊読むこと、そして物書きでなければならぬ。もちろん、一、二時間は本屋の雑事も手伝う。三つ目は「自伝」を

書いて提出すること。

《主流文化に幻滅し、痛手から立ち直るための場所を求め、世界をよりよくしたいと切望する者たち。》

それらの「自伝」に書かれていることは共通して右のようなテーマだった。

ジョージは店名を勝手に継承する二代目店主だが、すでに創業者のシルヴィア・ビーチも四十五年も前からこの本屋の特色を語っていた。

《当時、パリの街には才能のある人がひしめいていたが、そのほとんどが私の店に集まってくるような気がした》

一日一冊の本を読み、自伝を書き、何か執筆する、しかも根なし草の人たち、そんな才能の坩堝が祝祭のようにここに集まる。老店主のジョージは「書店を装った社会主義のユートピア」というが、単に常軌を逸した書店ではないかと著者のアーサーは考える。

《人間は単独より集団になったほうが強く、全体の生活の質を上げるためなら、ひとりの人間がためこむ富を犠牲にする価値があると信じている。まだユートピアは見つかっていないが、探しつづけなければならぬとジョージは信じて疑わない。》

この八十六歳のジョージの奇矯さは「焚き火」の原点だと思ふ。そしてその実現が本屋においてでなければならぬ

という信念が、ジョージの本屋を類いのないものにする。ここまでくれば本屋独立国といってもいいのではないだろうか。

ジョージの本屋は三〇〇年を経た六階建てのビルの中にあつた。十六世紀の修道院の土台の上に建てられたものだ。その昔フレール・ランピエ(灯火係の僧)という言葉があつたという。

「訪問者を歓迎するために灯火を絶やさず、なかば宗教的な献身の情で古い書物や迷える人の面倒を見ていた」

『本屋の仕事』の編者はこのフレール・ランピエ(焚き火の本屋)を探し続けているのではないだろうか。「紙に描けば実際の方角が失われる」というアポリジニの難問を本屋に求める。言葉にすれば視点が変わる、くり返し語るることによつて、気配として「焚き火(灯火)」を受け渡していく。ジョージの本屋には裏口から入れれば売り物でない本が二万冊も転がっている。本屋と「本や」の姿がそこにある。「本や」は気配へと導くオーラル・ストーリーの道しるべなのだ。

「笈」を背負い気配の中を行脚する。拾うべき本を拾い笈に収める。そしてこの奇矯な夢の架け橋を一足一足踏み越えていく。背負ったものを「笈の定有」と見立てる。

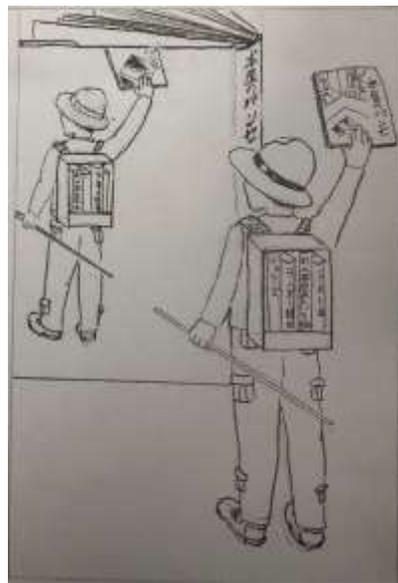
2024.12.21

(参考)

三砂慶明編著 『本屋という仕事』 世界思想社 2022

ジェレミー・アーサー『シェイクスピア&カンパニー書店の優しき

日々』河出文庫 2020



・「笈の定有」イラスト

・奈良敏行十三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年二月末 刊行予定

愚直に理想を語り続ける―宇沢弘文の後半生

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・)

「読む会」講師)

一月二四日(日)午後、鳥取県立図書館で「宇沢弘文の社会思想―『社会的共通資本』から学ぶ」と題する講演を行った(進行は内田克彦さん)。内容は、宇沢の没後一〇年に合わせて刊行した『宇沢弘文「社会を治す」』(小取舍)に基づいた、「一%と九九%」「社会的共通資本」「SDGs」の三題断である。

せいぜい二〇〜三〇人の参加者だろうと予想していた。「社会的共通資本」は複雑な要素が絡まっており、簡単な概念ではない。学究の徒としての宇沢の生涯は、成田空港問題の関与を除いては、波乱万丈とはほど遠い。会場は出身地の米子ではない。実際は、約八〇人収容の大研修室で八〜九割は席が埋まっており、「こんなにたくさんの方が!」と大いに驚いた。

講演(八五分)の後に、参加者から寄せられた質問に答える。私の経験では、講演後の質問はなかなか出ないものである。多くの場合、主催者が二、三人の「サクラ

をを用意する。今回は、内田さんが予め質疑応答に二五分をあてており、もちろん「サクラ」はいない。

参加者の多さを第一の驚きとすれば、第二の驚きは宇沢思想に寄せる熱い思いである。質問用紙は二〇枚以上も回収された。内田さんが一枚ずつ読み上げ、それぞれの質問に私が一分前後で答えていく。具体的な内容をご紹介できないのは残念だが、どの質問も核心を突いていた。予定通り講演会は二時間で終了。

一月一八日(火)の「読む会」(第二期三三三回、通算四二八回)では、講演会案内(日本海新聞一月一五日付、「持続可能な「ゆたかさ」―現代における価値を再考」)を書いていただいた吉田達彦さんの詳細なレジュメに沿って、拙著が取り上げられた。

レジュメの最後に、吉田さんは拙著(一一九頁)を引用している。私が最も主張しなかった部分である。

「宇沢は資本主義を否定することはない。従来の資本主義の地平を拡張、人々(一%の富裕層ではなく九九%の「普通」の人たち)の生活をよりよくしていくための理論的枠組みを構築しようとした。いつまでも実現しない「全体理論」の追求のために研究室に閉じこもるのではなく、心の底から戦い書くに値すると考える社会問題を理論の延長、理論の実証の場として捉えた(芯からの情

熱)。宇沢にとって理論と実践は地続きであり、常に両者の間を往還することこそが学問に携わる人間の使命であった。そこに私は学者としての最良の形を見ることが出来る。」

ちなみに、「芯からの情熱 (fire in the belly)」とは著名な歴史学者キャロル・グラックの「良い歴史には、大きな問題と深い経験主義と「芯からの情熱」が必要である」から引いた。

没後一〇年経っても、宇沢の評価は定まっていない。

自然環境、社会的インフラストラクチャー、制度資本を含む「社会的共通資本」概念は、あらゆる学問領域、社会課題がリゾームのように絡み合っており、軽々に論じることができないからである。

私は、宇沢思想の最も画期的な成果は地球環境問題対策の独創的な枠組みにあると考えている。

会期を延長して一月二四日に閉幕した第二九回国連気候変動枠組み条約締結国会議 (COP29) で最後までで紛糾したのは、先進国が途上国に対して二〇三五年までに毎年三千億ドル (約四六兆円) を拠出する気候変動対策基金の額であった。

この問題の淵源は、京都会議 (一九九七年、COP3) で「宇沢フォーミュラ」 (先進国・途上国を問わず各国の経済規模に応じた比例的炭素税、それをプールする大気安定化国際基金) が地球環境問題対策に消極的なアメリカの後押しする排出権取引 (宇沢の教え子であるノードハウスが提唱) に敗れたことにある。

「宇沢フォーミュラ」とともに実現のために心血を注いだ「三里塚農社構想」も現実政治に敗北する。

「社会的共通資本」論は理想の宝庫である。理論と実践を行き来した後半生の宇沢は愚直なまでに理想を語り続けた。

宇沢の著作は読み継がれている。代表作である『自動車の社会的費用』 (一九七二年) と『社会的共通資本』 (二〇〇〇年、いずれも岩波新書) は毎年一回以上の増刷が続く。吉田さんは講演会案内で宇沢思想を「たき火」に譬えた。「宇沢の「社会的共通資本」という種火に、おのおのがそれぞれの仕方で薪をくべる。宇沢の思想はそのようにして、今日に至るまで脈々と受け継がれてきた。」

私を含めて多くの人々が、人間・宇沢弘文の理想を実現しようとする愚直さに魅了されているのである。

「本のある場所」日記 二〇二四年十二月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

12月19日

谷中へなままる商店で「南陀楼綾繁さんと一緒に「ローカルメディア」を見る夜」を開催する。

なままるは昨年、三浦坂の途中にオープンした八百屋。店主の澤田七洋さんとお母さんが営む店で、予約制でランチも出している。

もう10年以上前になるが、西荻窪の〈松庵文庫〉で一箱古本市を開催したとき、店の前で野菜を売っていたのがなままるさんだった。七洋さんは本好きで私のことも知ってくれていたようだ。その後、谷中の〈貸しはらっぱ音地〉での出店を経て、谷中に店舗を構える。店内には小さな本棚があり、そこで、兵庫県朝来市の〈本は人生のおやつです!〉が選書する食べ物に関する本を販売している。

この店でお会いしたのが、文筆家の藤田千恵子さんだった。藤田さんは日本酒の酒蔵の取材を長年されてきてその関係の著書が多いが、それ以前、『愛は下剋上』(NTT出版、のちにちくま文庫)という素晴らしいエッセイ集を

出されており、私はそれを愛読していた。

七洋さんは私のトークイベントにも参加してくれ、「店で何かやりましょう」と云ってくれた。最近出た『「本」とともに地域で生きる』(大正大学出版会)は、なままるさんが野菜を仕入れている地方の話も出てくるので、ちょうどいいのではないかと思ひ、同書で紹介しているローカルメディアの現物を見せながら話そうということになった。私がこの10年ぐらいいやっている「ちいさな出版物の設計図をつくるワークショップ」の導入部でいつもやっていることなのだが。

藤田さんも交えて飲みながら相談するうちに、好評なら続けられるようなしくみにしようということで、第1回「東北編」として、東北の本の現物を私が持参し、藤田さんが東北の酒をセレクト、お母さんのつまみとともに出すことに。

なままる商店の店内は狭く、カウンターだけだと4、5人しか座れない。夏場に藤田さんの日本酒イベントを開催したときは、入り口を開けて外にも座ってもらったのとのだが、それでも15人しか座れなかったそう。今回は冬なので、8名限定に決めた。

この店にはすでに常連が多く、口コミで集まりそうだからと、SNSなどでは告知しなかった。私もメールで数名に

声をかけたただけだったが、すぐに満席となり、最終的には10名になった。店内の左右にお客さんが座り、私が真ん中に立って話すと、めっちゃめっちゃ距離が近い。

ローカルメディアを15タイトルぐらい見せながら話すと、1時間近く経っていた。そこから、藤田さんにバトンタッチし、会津若松や秋田の日本酒を飲み、粕漬や玄米のおにぎり、すいとんなどを食べる。お客さんには近所のお寺の方や、食に関する仕事をされている方もいて、非常に盛り上がった。18時半スタートで終わったのは21時頃だった。

ななまるでは『「本」とともに〜』を10冊仕入れていました。委託でなく買い切りなので店の負担にならないか心配していたが、参加者が次々に買ってくださったので、残り3冊になった。これは、イベントとしての満足度が高かったからだと思う。

ふだん本屋でやっているトークイベントも、テーマやお相手によって毎回の面白さがあるが、八百屋という場所で、本と酒・食を組み合わせた面白さもあるのだと教えてもらった気がする。もともと、本に比べると酒や食べ物の印象が強くなるので、ちょうどいいバランスにできるような工夫はいるだろう。

ななまる商店はちいさな店だが、ここでは、これまでやっ

たことのない面白いことができそうな気がしている。ここもまた、ひとつの「本のある場所」なのだ。

12月30日

昨日、年内最後に行った〈往来堂書店〉で買ったのは、ジョー・ネスボ『失墜の王国』（早川書房）。500ページ以上ある北欧ミステリ。初めて読む作家だが、ノルウェーの村で暮らす兄弟の周りで起きる過去と現在の事件から目が離せず、最後まで一気に読んでしまった。冒頭に出てくる鳥の生態が彼らの運命を告げる。

帯の裏には〈カーカス〉（ノルウェーの新聞か？）の評が引用されている。「家族という幻想、そして親密な町という幻想が、壮大なスケールで構築され、壊されていく」。まさに本作の本質を突いている。

訳者の解説によると、本作には続編もあるということ。あのラストから続きが描けるとは信じがたいが、ぜひ読んでみたい。早期の翻訳刊行を望む。

（編集部注）

南陀楼綾繁 『「本」とともに地域で生きる』 大正大学 2024

見えるものと見えないもの日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

さつきまで機嫌よく明日の準備をしていた息子が急に泣き出した。「ふゆやすみがふつかしかない」という。指さした先の時間割のプリントを見てみる。今週は火曜日まで学校がある。いつもなら水曜と木曜の時間割が書かれている二日分のところが「冬休み」となっていて、金曜日の欄に学校がはじまる一月八日の予定が書かれている。省略するということを知らない小学一年生の目には、たのしみにしていた冬休みが水木しかなく、金曜日からまた授業があるように見えたのだろう。気持ちは分からなくてもないがそんなことで泣かないで欲しい。おとなに笑われて息子は今度は怒りはじめた。何日もあるはずの冬休みを「〜」とかいう記号で隠しても平気になったのは何歳からだっただろうか。六歳でもわかる子はわかると思うのだが。

「本屋、始めませんか」とかいう広告が目につく。SNにも何度も出てくるし、駅には大きなポスターが貼られているらしい。かっこいい写真と映像。そして違和感。

「本屋をやりたい」という声はある。とてもたくさん聞く。でもそのことと「本屋、始めませんか」という広告は全く別のものだと思う。本屋は誘われてはじめるものではない。なぜなら儲からないからだ。本屋は儲からないが「本屋、始めませんか」とささやいてくる人はちよつと儲かる仕組みになっている、らしい。儲からないとわかっていることに人を誘っておいて、自分はちよつと儲けようとするのはなんといかずるくないか。本当は全然するくないのかもしれない。純粋な気持ちで応援したいと思っているひとが組織の中のどこかにはいるのかもしれない。そういうひとのおかげでいまも本屋をやっています。でもちよつとずるいと思ってしまうのはなんなんだ。

本が書かれるところから、手に取られるところまでのあいだにある無数の仕事たち。ひとつひとつはめちやくちやおもしろいの集団になると急に灰色になる。一緒にやっている仲間だと信じたい。

おとなたちはミートソースのパスタをつつきながら焼酎を飲んでる。子どもたちはテレビゲームに夢中だ。唐突に「A Iに負けないためにはどうしたらいいか」という話が始まった。曰く、二つ以上の技能を身につけることで幅が広がってA Iに負けることがない、と。なるほど。人間とA I、今はどちらが優秀なのだろう。来年はどちらが。先のことは何も分からない。そもそもA Iと戦いたくないのだがそれはどうしたらいいのだろうか。だいぶ前に別の人に言われた言葉を思い出す。「この店はごちゃごちゃしすぎてA Iには再現不能やな」。もうちよつと見やすいように片付けろよ、と言う説教なのだが、角度を変えれば褒め言葉のようにも聞こえる。そのように聞こえるのでそれでいいのだと思う。ごちゃごちゃした場所、ということが定着してきたおかげで、なにもしていないのに「今日はちよつとスッキリしてるね」などと言われる。なにも変わっていないのに進化したように見えるA Iとかあるんだろうか。A Iというだけで毎日勝手に進化してそんな雰囲気は持っているが。

古本市が終わり、本でパンパンになったクルマの隣ではんやり佇む。次会うのは岐阜ですかね、富山も日程が決ま

りました、と先の予定をボソボソと話す。来年もまた同じようなスケジュールであちこちに本を持って行くことになりそうだ。小さな場所をつづけていくために、見えないところで一生懸命はたらく。べつに見える所で一生懸命だっ
ていいんだけど、それだけでは足りないで見えないところでもはたらく。見えないところが大きいのでいろんなひとがいる。いろんなひとがいればなんでもできそうな気がする。そうして一年がたった。来年もそうしているうちにまた一年があつという間に過ぎていきそうな気がする。そうなればいい。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

今日のよろこび

白井 明大

(詩人)

ときどき、年に二〜三回、思い出したようにメールマガジンを発行することがあって、先日もひさしぶりに送ろうかと書きかけたまではよかったのだけれど、なんだか自分が、ちょっとせかせかせかした気持ちでいるように感じられて、そんな状態で送るのもためらわれ、けっきょく出さずじまいになっていた。

書いていたのは、行分け詩というわけでもなく、ただメールを書くときによく改行を入れるそれそのままの体裁の、ですます調の一文で、知己からおいしいシュートレンをいただいたのがうれしく、お礼の便りを送ったときのできごとを記したもので、なんとというか、一日のほんのさきやかなひとときに、その日あったよろこびの最たるものを見いだせるようなことがしばしばあるような気がするのを、あまり深く考えもせず、気がするままに綴ってある。

偶然というものにも大小あって、その小さいほうの偶然が、個人的にうれしいものでもあったとき、よろこびがい

や増すように思うのも、ほんとうにそうなのか、小さいとどういうことで、偶然のよろこびがいくつもある中の、どれがどのくらいだったかといつた自分の気持ちと気持ちの比較など改めてしたことがあるわけでもないのに、小さいという形容詞に安易に頼っているかもしれないとは思いつつ、それでもやはり、ふと意識にとまったさきやかな事象の符合には、他と比べてどうこうといったことは措いても、なにか、そのことよってしか感じられないうれしき、よろこびというものが実感としてあるんじゃないだろうか。ともかく短い文章なのだけれど、こんなことを書いた。

「絵本の切手」

今日あった

とてもほんのさきいな、うれしかったことを

一日のおわりに思い出してみます。

たよりを出しに郵便局を訪れたとき

思いがけなく、送り相手の好きそうな絵本の絵が

そのまま切手になってるのに気づいて

それを貼って出せたこと。

どうしてそんな素敵な切手が

ひよっこりここで現われてくれたのか

窓口で目が合ったような気がして

びつくりしながら

そつと、きれいにまつすぐになるように

貼れたとき、なんだかふさわしい場所に

ふさわしいものが

ぴったり合わさった感じがして

(それは気のせいなのだけだ)

心ひそかに、小さなうれしさが

湧いてくるのを感じていました。

どうしてか、ぴったりのものを、ぴったりの場所に

見つけられたような気がしたことが

とてもほんのささいな、うれしいことでした。

と、いま読み返してみても、書かないでいれば書かないまま流れていったらうできことに思えて、ああ、あのとき、ふと郵便局の窓口で切手の絵柄が目にはいったとたん、やっぱり吸い込まれるように気持ち動いたんだっとな、とありありと記憶がよみがえるから、流れ去ることと思いつ出せることは、できごととしては同じでありつつも、道行きが変われば(この場合でいえば、文章に書き留めたこと)によって(変わるんだなど、これもささいなだけけれど確かなこととして感じてしまう)。

では今日はなにがあったつけ、とふりかえる前に、今日は今日でとくべつなことがあったと、もう心に浮かんでい

る。しっかりと手ざわりがあつて、思い返しても、いま見

てもよろこびがよろこびとしてあることに、植物をいただ

いて、それが今日とくべつよろこび、うれしき。

お礼状を送ろう、あの絵本の切手を貼ろうかな、とそん

なふうに思いながら、静かに心があたためられるのを感じ

つつ夜が更けていく。

そういえば鳥取に来て、野鳥の名前をたくさん覚えたい

ら、こんどは植物の、目にふれた草木花の名前を覚えたい

と思っていて、その道先案内でもあるかのような贈りもの、

このよろこびを抱えて山野に歩きにいこう。



(編集部注)

白井明大 『ヘリヤ記 I』《声たち》(詩之友社) 2024

ジチコウミンカン体験記

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

この一年、地元の自治公民館の役員(総務部長)というのをやった。他の市町村ではふつう「町内会」と呼ばれる組織。倉吉市ではそれをジチコウミンカンと呼ぶ。それらは上井、成徳など市内小学区ごとの「地区公民館」に束ねられているのだが、最近、地区公民館は「コミュニティセンター」に呼称が変わった。

◇ ◇ ◇

自治公民館はさらに十〜二十世帯ごとに「班」に分けられ、「班長」は市報や県政だよりの配布、回覧版や自治公民館費の徴収などのお世話をする。私は十四世帯の班なので十四年に一回、班長の番がやって来るのは仕方がない。

で、2024年の正月、班長の番がついに来たので久しぶりに住民総会に出て、周りに「えーっと、私は何班でしたっけ？」などとトシマな質問をしていると、なんと勝手に総会資料に「総務部長 萩原」と私の名前が書かれてい

るではないか!

さらに、「よほどの理由がない限り、断るのはやめて下さいね」という館長の話。どうやら「あいつは最近、会社を退職して家にいる時間が増えたようなので、やらせたらどうか」という話になったらしい。

大迷惑である。退職してからはゲストハウスの運営から時折あるライター稼業、講演会の採録、WEBニュースサイト(NPOオウンドメディア)の編集長や、元いた新聞社の社史編さんなど4つも5つも仕事をこなして、なんとかフーフー乏しい年金の穴埋めをしている「個人事業主」である。じつと家になんかいられない。

が、一方で後ろめたさもあつた。引越して来て30年、これまで東京や大阪、但馬など県外勤務や鳥取通いが多かった。岡山生まれで、親類や同級生もない私は、新聞社で働いていながら自分の住んでいる町内のことを全く知らず、お役に立つようなことをした覚えがない。

まあ、仕方がないか。

◇ ◇ ◇

ところがビックリたまげたのである。

ここは私の文より、私の「窮状」を知って取材にやって来た後輩記者の記事を転載した方が分かりやすい。

『多い時は10種類程度、5〜6千枚の資料を数える』。

同自治公民館で総務部長を務める60代男性は、積み上げられた市報の山を前にため息をつく。

十一月末現在、市内最大の438世帯を有する同自治公民館には、市報などを個別配布しないといけない集合住宅が7棟、計約140世帯に上る。仕分け作業は総務部の担当で、月2回の配布日前には男性が1人で黙々と作業している。『みんな仕事で対応が難しいので、時間の融通が利く自分がやっている』というが、『配布日直前は予定を入れられない』と打ち明ける（日本海新聞12月7日付）。

そうなのである。私の住むところは集合住宅を合わせる600世帯近く、鳥取市の福部町や佐治町の半分以上の世帯数を有する「巨大自治公民館」だったのである。もう「町内会」などという規模ではない。



倉吉市に来たばかりの頃は、市政を担当したこともある。「住民自治の活性化」を掲げ、市内12校区の公民館ごとに自由に使える事業予算を交付していた当時の牧田実夫市政にずいぶん感心したものだ。どうやら「自治」より「役所の下請け機関」になりつつある。

そして、昔は「役員の草刈り場」だった60代の退職者年金生活者たちも、今ではすっかり様変わりした。年金ではやっていけないので私と同様、ほとんどの人間が日中は

働いている。息子や娘に任せて自分は家で楽隠居、「そろそろ町内会の役でも」などという、恵まれた高齢者はほとんどいないのである。気が付けば周りは「役員だけは勸弁を」と逃げ回る人ばかり、という状況になった。



さて、嘆いていても始まらない。市に働きかけて、希望者は市報等の配布物がオンラインで読める「デジタル化」が実現したが、「それでは読めない」という高齢者がまだ多いから、根本的な負担減にはほど遠い。

ただ、一年間経験して、わが地元の姿がよく分かったし、知り合いも増えた。子どもたちでにぎわった夏の納涼祭は、準備の苦勞が吹き飛ぶ充実感があった（実は県内でも珍しい、子育て世帯が増えつつある人口増加地域なのだ）。

一年の任期を終え、やって損はなかった…と言いたいところだが、「後任の総務部長はあてがある」と言っていた館長から、その後の返事がない。ようやくお役御免なのかやむなく続投か、ドキドキしながら年の瀬を迎えている。

Stop, Look, Listen (To Your Heart)

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

二〇二五年に、鳥取県立美術館が開館する。二年ほど前に、アンディ・ウォーホルの有名な作品「ブリロ・ボックス」を三億円で購入したことが、話題になった。というより「県民からは批判の声が」と、マイナスな取り上げ方が目立った。個人的には、たった一つの作品でこれだけ注目を集めたんだから、十分元が取れたのでは？ と思った。

そして今年（二〇二四年）の十一月には、山下清の「鳥取砂丘」も購入したとニュースが流れた。そのために用意された予算は七二六万。今回は批判がほぼ見られなかった。作家の知名度・題材・価格、どれも妥当と思われるだろう。そしてこの反応の差から、「アートとは？」という問いが生まれる。

ちなみに「鳥取砂丘」が描かれたのは一九五六年で、「ブリロ・ボックス」の制作は一九六四年と、たった八年しか違わない。

かけ離れた（ように見える／見られている）二つの作品が、同じ空間に展示されている状態を夢想して、勝手にワクワクしている。

好きな言葉は「相反するもの的一致」と言ってみよう。有名な作品は、マン・レイの「解剖台の上のミシンと蝙蝠傘（こうもりがき）の偶然の出会いのように美しい」。詩人のロートレアモン伯爵の「マルドロールの歌」から取られている。

本来の意味や機能が引きはがされ、新たな意味を読み込む。（鍛えたら大喜利が上手くなりそう。閑話休題）

*

店頭に本を並べる時は、納得感と違和感のバランスを考えている。ジャンルで分かりやすく並べる。ジャンルは違うがキーワードでまとめる。古本の文庫は著者順で、新書は出版社ごとと、セオリー通り。

一方で、連想ゲームのように、自分の中で勝手に共通点を引っ張り出して、隣同士に並べる。お客さんが買われた本をヒントに、コーナーのようなものを作ってみる。ただ乱雑に棚につっこんでみる。

伝わるかどうかは、ほぼ賭けだ。というより伝わらなくても良い。店内にあえてジャンルサインを掲示していない理由のひとつ。誰かにとつての納得感が、他の人にとつては違和感になる。

*

美術史のおよび英米文学史的な意味でのマニエリスム・シユルレアリスム・表彰文化論への興味と、音楽の趣味(UKのニューウェイヴ・ブラックミュージック他もちろん)が、自分の中で繋がらず、またつなげようとも思っていない。そこに登場したのが、後藤護という書き手だ。最近肩書きを「暗黒批評家」から「暗黒ワクワク学者・小学二年生」に変えて、ちょっと何言ってるか分からないが、今までに出した本は三冊ともクレイジー。

「いかにもヒップホップ!」なジャケットや宇宙への憧れから、「ブラックネス(黒さ)」だけではなく、「ダークネス(暗さ)」「ゴス」を読み込む視点が驚異的で、脳みそを上書きされて解像度も上がった

解像度の上があった(はず)の目で、本を読み、売場を見、本を並べ替え、今日も本を売る。

【参考文献】

後藤護

『ゴシックカルチャー入門』Pヴァイン

『黒人音楽史 奇想の系譜』中央公論新社

『悪魔のいる漫画史』(ブループリント)

実は店頭には並んでいない。ここでネタバラシしたので、仕入れておきます。

『ロックと悪魔』黒木朋興 春秋社

へヴィメタルは門外漢なので、詳しい方に教えてもらいたい。

『パレポリ』古屋兎丸 青林堂

兎丸のクレイジーなデビュー作。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善梓

本を作る側から (22)

村瀬 謙介

(小取舎)

抗う

昨年はこのフレーズをよく聞いた。鳥取大学地域学部で文化を調査している学生が発表でよく使っていた。小取舎も事務局として参画し、年末に開催した「街場の老人のための○○塾(後に○○塾の部分はおでん塾と命名)」においても、延興寺窯を研究テーマとしている学生が感想で、「大量生産や大量消費社会のなかで登り窯で作ることであったり、材料にこだわって作られているのは社会に対して抗いだという風を感じた」と言っていた。

抗いかあ。歳を重ねることは昭和から続く経験であり現在の積み重ねであったと思うのだが、今まで感じていなかった「抗っている」という感覚を若い世代から幾度も認識させられた。はたして私は抗っているのだろうか？確かに老眼が来始めたり、四十肩になったりして、身体に意識が抗っている感は否めないが……。そういうえば小取舎は、「デジタル出版のこの時代になぜあえて？」と聞かれることが

多い。民藝も古書店も出版社も伝統工芸も着物も何もかも「敢えて」と言える。元々の歴史を知っているようがいまいが、一〇代や二〇代の多くの方からしたら3Dプリンターのある便利な今の時代に抗っているように見えるのだろうか。そもそも柳宗悦が提唱した民藝運動は、機械による大量生産が主流となる中で、職人たちの手仕事に宿る個性や温もりを見出し、それを尊ぶことであった。その時すでに民藝運動は時代に抗う行為だったと言える。

デジタルネイティブな彼らに対して「敢えて」やることの意味と価値を伝えることが必要で、もしここで現代の便利社会に対する抗いをやめてしまうと全く別のものになってしまうったり、歴史が途切れてしまったりする。そうなる再生させるのに莫大なエネルギーを要する恐れがある。

デジタル化が進み、電子書籍やオンライン記事が主流となる現代において、紙の本を愛する人々は確かに時代に抗っているように見える。紙の本の質感、匂い、そしてページをめくる感覚は、デジタル化された情報媒体では得られ

ない独特の体験を提供してくれる。それゆえに、多くの人々が紙の本を大切にしている。

しかし、一見すると時代に抗っているように見える行動や価値観が、実際には新しい時代の価値観に深く影響されている場合もある。例えばブームがそうだ。写真やレコードなどのアナログ再評価、エコブームやスローライフ、ミニマリズムといった流行が、度々「抗っている文化」に再注目させる。さらに文化を継承・伝承していくことにオンラインを使った教育を行う方法もある。「抗う」ことが「純粹な抵抗」とは言い切れない複雑な側面を持っており、時代に抗うことと時代に適応することは、必ずしも対立するものではなく、むしろ相補的な関係にある。

このような考え方が、いかにして持続可能で意味のある価値を作り出していくかという問いにつながる。技術革新や価値観の変化がどれだけ速くても、その流れの中で自らのアイデンティティを保ちながら、新しい文化を創造していくことが求められる。

最終的に、文化が時代に抗うという姿勢は、その時代に深く理解し、それに問いを投げかける行為として解釈されるべきかもしれない。私の知人（大先輩）に歴史的仮名遣いを大事にされる方がおられるが彼にお会いするたびにそう思う。その問いは過去への単なる回帰ではなく、未来に向けての豊かな選択肢を模索する試みでもあるように思える。時代に抗うことが新たな価値を生み出す原動力であり得るということ。そして、その価値は次の世代に受け継がれていくべきだと思う。

さて、今年も抗うことにしよう。

・小取舎の刊行物

『宇沢弘文「社会を治す」
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



書くことなんかない

古賀 啓三

(米国ミシガン州)

奈良さんに音信不通の掲載を再開しないか、というお誘いをいただき、極めて単調な生活をしているので書くことがないです、と弱気を言うのと、誰も書くことなんかないだよ、だけどそこを敢えて書いてるんだ、音信不通に明日はないんだ、というハードボイルド（風だけどよく考えろと意味不明）な殺し文句（もしくは脅迫）で書くことにした。

多和田葉子の『地球にちりばめられて』にはヒルコという Token Japanese のキャラクターが登場する。多和田は独語でも創作するらしいが、その場合にも物語にとって中核的な役どころの日本人を登場させているのだろうか。僕を書く小説にも日本人、もしくは日系人の出て来ない作品はないが、日本人不在の米人キャラクターのみのものを書くとしたら、英語で書く方が容易なのでは、と前にも書き、そのわけを考えてみた。アメリカ人主体の環境に作者の僕

が受け入れられるには、僕の中のアメリカ人の部分を引き出さなければならぬ。それは僕が晒されている実社会と同じである。その最も根幹的な行為が英語で話す（書く）ことである。登場人物がアメリカ人だけの作品に筆者の僕がつかろうとすると、その「臍の緒」は言葉、くらいしかない。

バルガス・リヨサ『楽園への道』は十九世紀フランスの、労働者と女性の人権を求めた「スカートをはいた煽動者」フローラ・トリスタンとその孫、ポール・ゴーギャンの物語。ゴーギャンってあの画家の、です。二人ともフランス人、舞台もフランス、イギリス、タヒチがメインで、ペルーは両者とも申し訳程度、ゴーギャンに至ってはペルーに関する記述はおそらく四百字以下だが、「私とフローラとゴーギャンの接点はペルーである。二人がペルーに行つてなかつたら、関心を抱かなかつたことは明白である」と筆者。続けて読んだ『ケルト人の夢』でも主人公はイギリス人、舞台はコンゴとアイルランド、ペルー少々。リヨサの、この作品を書く動機に関する言及を見つけることはできなかったが、その「臍の緒」もペルーであることは明白である。小説を読む際、このストーリーではどの部分が「臍の緒」として作者自身とつながっているのだろうか、と読み解くのは面白い。アルファ・リーダーの板野さんに『複眼人』と

いう本を勧められた。作者は呉明益という台湾の人。主人公の台湾人女性アリスは家を新築する際、以前デンマーク人の夫と一緒にスウェーデンで訪れた、建築家アスプルンドによる「夏の家」からインスピレーションを得る。突然そこまでの流れと異質な印象を与えるその詳細な記述は、筆者自身がその建築物から強いインパクトを受けたのが明白。そして本当にそういう家を建てちゃったのかもしれない。強い思い込みで建てた家のことを書きたくて書けちゃう小説もあるのである。家自体に関する言及は末梢なものになったとしても、そこから虚構がピンボールのように弾かれまくるのが創作の醍醐味である。この小説を読むにあたって面白い体験をした。主人公アリスは若い頃、小説の実作者を夢見るが、書くこととすると書くことがなく挫折し、研究者になる。若きアリスはボール・オースターに傾倒していた。これも「筆者と作品の臍の緒」として使えそうだな、と閃く。ピオトープというNortonの黎明期に、ソローの『オルデン』を読むシーンが、オースターの『幽霊たち』にもありますよ、と指摘したことを覚えておられ、読み巧者ということだけでなく、読書室の課題にオースターの作品を取り上げ、レベルの高い資料を作成された方、ということ、奈良さんに、板野さんを紹介していただいた。オースターへの親和性なら君にもあるだろう、と。板野さ

んとはシンクロニシティ・意味ある偶然のこともしばしば話題にするので、「若きアリスはボール・オースターに傾倒していた」ことを、偶然ですよね、と共有したい、ということもあって、記述箇所を探すのだが、これが何度読み返してもないのである。丸谷才一に『樹影譚』という名作中の名作があるが、この中で、主人公の老作家が自分が壁に投影される樹木の影に惹かれるのはなぜだろう、と怪しみ、樹影を扱った短編がナボコフにあったはずだ、と思いつけるが蔵書には見当たらない。友人のナボコフ研究者に尋ねてもそんな作品は知らない、と一蹴され、あれは夢であつたとしか考えられない、という結論に至る。この作品も作家と臍の緒のことを書いた小説だと強弁できないこともない。僕の思い込みも夢で読んだのであろうか。作家が書けなくなる、書くことがなくなる状態を writer, s block と言う。「楽園への道」がリョサの何作目の作品かは不明。彼が writer, s block に陥っていたか否か、知る由もないが、逆説的に言えば、「書くことなんかない」とき、臍の緒をうまく手繰っていけば書けちゃうのかもしれない。奈良さん、この手法でコラム再開、頑張ってみます。

「団地のふたり」に憧れる

山下 篤美

(魔女修行中)

べて、余りお金のかからないもの。誰かに迷惑をかけるでもなしと、家族には黙認されているようだ。

そんな父の趣味が、心底有り難かったのが今回のドラマ視聴。実家に顔を出す時は、急いで茶の間に直行。早く早くと父を急かしてドラマを見させてもらった。

このドラマ、ご覧になった方も多いだろうが、私の世代にはドンピシャリのサブカルが満載。昭和の懐メロが出てくる度に、一緒になって熱唱。「お母さん、なんで知ってるの?」と不思議がる娘らに「昔の歌手はな、年に数回しか新曲を出さなかったんだよ。家族揃って、こたつ囲んで、同じテレビ番組を見ていたしね」と説明。

とにかく、曲を聴くと、記憶の引き出しから歌詞がスルスル出てくる。認知症になると、近々のことを忘れても、昔のことは案外覚えていそうだが、自分の脳の奥の奥にある記憶が、こうも鮮やかに甦ってくると、確かにそういうものかもしれないと思う。

すっかりドラマにハマって「これは買わねばなるまい」と原作も購入。「団地のふたり」さらに「また団地の二人」(藤野千夜著)。ドラマは原作以上に周囲の人々のキャ

私の家にはテレビがない。よって普段NHKは見ない。大好きなドラマは「ゴゴ」で見られるので、特に困るということもないのだが、それでも小泉今日子と小林聡美主演の「団地のふたり」がNHKで始まると聞いて、見たくて見たくて仕方がなかった。

幸いうちの父親の趣味は、NHKのテレビ番組の録画と、その中からセレクトしたものをDVDに焼くというものだ。タイトルを手書きするのが、程よい脳への刺激にもなっているらしい。ただ、どんどんアーカイブが量産されていて「これ一体、将来誰が見るんだか?」と思わなくもない。しかし、以前の趣味の「石の購入」と比

ラクターが立っていて、その暮らしぶりにも大きくスポットが当てられ、大変愉快な脚色だった。しかし、決して原作の穏やかきな世界観を壊してはいなかったと思う。とにかく主人公のキャスティングが秀逸。そのせいで、原作を読んでも、二人の声になって会話が聞こえてくるくらい。

ご存知ない方のために、一応概要を。主人公は五十歳を少し過ぎた幼馴染の二人。昔は多少は売れたのだろうけれど、今は大きな仕事がなく、フリマやネットオークションで稼いでいるフリーのイラストレーター「なっちゃん」。もう一人は、学内政治に巻き込まれ、いまだに非常勤講師の身分のまま、大学で文学を教えている「ノエチ」。

ともに男運がなかったようで、それぞれに結婚や恋に破れ、生まれ育った団地に、独り者として舞い戻っている。そんな二人には、かつてもう一人、団地友達がいた。「そらちゃん」という花好きで、おっとりした女の子。病気で早くに亡くなってしまうたそらちゃんは、ずっと二人の心の中に生き続けている。いつかそらちゃんを主人公にした絵本を二人で出そうと願っている。そんな二人と、団地に暮らすご近所さん(殆どが高齢者)との何気ない、でも心温まる日常の暮らし。

ざっくり言えばそんな内容だ。実は、還暦あたりから、終の住処のことをいついつい考えてしまうようになってきた。あと何年働けるのか？ 否が応でも自分の体力の限界が見えてくる。そんな不安だらけの将来に、決して華々しい人生とは言えないのかもしれない、なっちゃんとノエチの暮らしが、しかしとても豊かであるのに「これでもいいんだよな」と癒される。なっちゃんの作る料理や、二人のおしゃべりに、そばで一緒に加わっているかのようで、とても満ち足りた心安らかな気持ちになる。やっぱり最後に頼りになるのは、気の置けない無駄話こそが楽しいと思える女友達のかな。そんな結論を導き出してくれた作品だった。

汽水のほとりから (45)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

ジョン・レノンの命日としても知られる12月8日夜私の自宅近くでモリテツヤくんが営む汽水空港において特筆すべきイベントが開かれた。「とっとりマヌケ大作戦」と銘打たれたこのイベントは、書店らしく、たまたま今年揃って新刊を出すことになった東京在住の3人のゲストを招いて出版記念会の体裁で行なわれたが、その実、来年開店十周年の節目を迎える汽水空港が新たなフェーズに入ったことを祝うかのような記念碑的イベントであった。

3人のゲストとは、『世界マヌケ反乱の手引書 増補版』(ちくま文庫)の松本哉(はじめ)、『だめ連の資本主義 よりのしく生きる』(現代書館)の神長恒一、『ストーリーの思想 増補新版』(ちくま文庫)の毛利嘉孝である。

いずれも汽水空港店主のモリくんにとっては憧れの先達であり、松本哉は「素人の乱」の、神長恒一は「だめ連」の、

毛利嘉孝は「カルチュラル・スタディーズ学会」の、それぞれの牽引者として90年代から活躍し続けてきた。イベント当日のゲスト紹介の際、モリくんは彼らへの想いを「キッズ」という言葉で表現していたが、まさにガキの頃から彼らの本を読み、彼らの行動をチェックし、彼らのイベントに参加してリスペクトし続けてきた3人である。

事実、彼は、「素人の乱」が主催し、「だめ連」も毎回参加していた「なんとかフェス」に行き、「カルチュラル・スタディーズ学会」が企てた「カルチュラル・タイフーン」にも足を運んでいる。また、汽水空港を起ち上げてすぐにそのことを彼らに伝え、広く知られるきっかけとなった。

実際、今から8年前、公の出版物で汽水空港という活字を初めて見たのは、今回文庫化された『マヌケ反乱の手引書』の単行本においてであった。本の巻末に付された「世界のとんでもないスペース一覧表」の中で、汽水空港は松本哉によって次のように紹介されている。「田舎に自力で作った古本屋。店主のモリテツヤくんが筋金入りの自力製作男で、小屋から何から全部自分で作っている。田舎、DIY、古本……と言う、金の匂いがしない3大勢力をかき集めたような店だけど、ケロっとしてる。全然意味がわからないけど面白そうなので、とりあえず行ってみるしかない」。

ちなみに、松本哉は「ケロっとしてる」と書いているが、常にそうだったわけではない。というのも、この本が出て二ヶ月後に私は東京旅行を思い立ち、松本らが営むマヌケ宿泊所を利用するため、高円寺の彼のリサイクルショップを訪ねているが、その際に彼と次のような話をしたことを覚えていからである。開店から一年、現在閉店休業中の汽水空港を店じまいし、山口県の船大工に弟子入りしたいとモリくんが言ってますが、どうしたものでしょうかと。すると、カウンター横にいた常連客とおぼしき若い女性が「人生、何事もチャレンジだよ」などと口を挟んできて、ずいぶん無責任なことを口にするるとあきれた記憶もある。

それはともかく、その後、モリくんは結婚して心機一転、店をリニューアルオープンさせ、今年あたりからようやく経営も軌道に乗ってきたようで、そのようなタイミングで今回のようなイベントが開かれたのは、右のような当時を知る者として、隔世の感があり、感慨もひとしおであった。

とはいえ、先に述べたように、来年限店十周年を迎える汽水空港が新たなフェーズに入ったとする理由は、経営が軌道に乗ってきたということだけにとどまらない。むしろ彼がこの十年間に田舎町で地道に積み上げてきたものがようやく世間に認知されるようになってきたことがその最大の理由である。そして、そのことを記した文章が前掲の毛

利嘉孝の『ストリートの思想 増補新版』に見えている。

毛利は今回の増補部分において、汽水空港を皮切りに、松崎のゲストハウスたみや浜村のパーリー建築などにも言及し、この十数年間に鳥取で起きた新たな動向について紙数が費やして紹介し、その上でこう述べている。「このようにDIY的なオルタナティブ・ライフを実践している人と話していて気づくのは、彼らがすでに日本中の似たようなオルタナティブ・スペースやゲストハウスとインフォーマルなネットワークを形成していて、いろいろなノウハウや人的ネットワークを共有しているという事実である。鳥取のなかだけではなく、日本中、そして場合によっては海外とのネットワークも形成されている（実際、ゲストハウスの滞在者には海外からの旅行者も少なくない）」と。

本来「ストリートの思想」は、反資本主義的な生き方を実践する都市の思想である。が、著者は今回の増補部分の最後で「二〇二〇年代の「ストリートの思想」は、もはや狭義の都市空間にとどまるものではなく、ヴァーチャルな空間とリアルな空間が交錯し、都市／地方の区分を超えたさまざまな隙間から生まれるものではないか」と述べた。新たなフェーズに入ったとは、この局面においてである。

スネーク・セルパン・サーペント

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

地元伝わる随筆集から、今年の干支ネタを拾い出してみた。意識・潤色があります、念の為。

高草郡に鉄砲狛をよくする家士がいた。飼犬がしきりに吠えるので出て見ると、裏の井戸に六、七間(約十数メートル)はあろうかという大蛇が絡みついて、大薬缶のような鎌首を擡げ、目を爛々と光らせている。家士は火繩銃を構え、頭を打ちぬいた。死体は、丈四間半(八メートル)、胴回り一尺二寸(四十センチ弱)程もあつた。(「佐藤太郎兵衛うわばみを打事」・因幡)

豪農の屋敷に、二十丈余(約六十メートル)の銀杏の大木があつた。枝葉が繁り過ぎるので、木登り上手の農民に枝打ちをさせた。俄かに下が騒がしくなつたので、見下ろすと、頭が五升鍋程もある大蛇が這い登つてくるではないか。男は鉞(まさかり)を真つ向から打ち下ろし、蛇は地

響きを立てて地面に落ちた。丈七間半もあり、鱗は坪皿二つ分程もあつた。石のように頑丈で、火箸で叩いても欠けもしなかつた。(「八東郡にて大蛇殺事并大人の足跡の事」・因幡)

倉吉の樵が山に入り、木の上で枝を伐つていると、大蛇が登つてきた。樵は斧で頭を真つ二つに割つて退治した。その夜、男の家に、殺した筈の大蛇がやつて来て、窓から入ろうとする。男が「昼間の手並みを忘れたか。同じ目に遭いたいか」と恫喝すると消え去つたが、その後、いつ再びやつて来るかとおちおち寝られなくなり、気鬱になつて三、四十日経つて死んでしまつた。殺された大蛇の怨念が、仇を討つたのだらう、と人々は噂した。(「蛇の幽霊の事」・雪窓)

江戸屋敷詰めの足軽が、こつこつと金を貯め、同心の株を買つた。国元にも縁者はなく、懇意の商人に、自分の後日頼んでおいた。半年程して同心は病死、依頼どおり商人は、残された金子を持ち帰り、砂糖箱に入れ、紙に包んで、位牌と共に仏壇に収めた。ある時、取り出してみると、箱の中に一寸程の小蛇が入り込んでゐる。「どうして入つて来たのか」と追い出し、元に戻しておいたが、どうも合

点がいかなので、四、五日後に再び開いてみると、またしても蛇が入っている。「どうやら、あの同心の執念らしい。恐ろしいことだ」と、この金子を寺の修繕のために寄進し、懇ろに弔った。（「人の執心蛇に成し事」・因幡）

ある寺に、美しい小姓がいた。寄宿していた遍歴の僧が恋慕し、遂に病臥してしまった。小姓が自室にいた時、窓辺に小蛇が這っているのを見つけ、煙管の雁首で頭を押さえた所、蛇は忽ち死んだ。時を同じくして、病の僧が、火傷を負って「ああ、熱い！」と一言叫んで死んでしまった。（「人の執念小蛇となりて頭われし事」・雪窓）

裕福な盲人の妻の下に、夢うつつの中で、見目美しく、年若い男が訪ねて来るようになった。やがて懐妊するが、流産してしまう。産湯の中には、白蛇の子が三匹いたという。（「重都と言盲人の妻蛇の子を産する事」・因幡）

絹川某の妻が子を産んだが、夫にその場を見せなかった。彼が覗き見すると、大蛇が赤ん坊の頭を舐めていた。妻は「見られなければ、この子の体は鉄のように強い体になりましたもの」と言い置いて去っていった。子は成人して、戦場でも兜を被らず、頭で木に釘を打ち込んだ、という。

（「第二十段 絹川有之助先祖大蛇事」・怪談）

三州の話として紹介される。下女が「大蛇が来る」と言って逃げ帰って来た。見ると、破風から頭を突っ込んで、梁の上に入ってくる。侍は武功の人であったから、たちまちに大蛇を斬り殺した。人々が集って来る中に、山伏がいて「大蛇には雌雄があり、崇りを成す。私が被ってあげよう」と言うので、頼むと、山伏は二本の針を所望し、蛇の両目に刺して、帰っていった。その日から、侍の目は潰れ、三年経つまで元に戻らなかつたという。恐らく、かの山伏が、大蛇の番（つがい）だったのだろう。（夜話）

【凡例】

因幡

『因幡怪談集』

雪窓

『雪窓夜話』（上野忠親）

怪談

『怪談集』（野間宗蔵）

夜話

『因府夜話』

内坪井町日記

(8)

齊藤仁昭(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務)

十一月某日

腰痛のために一週間も会社を休んでしまった。寝返りにも一苦労。立ち上がったたり座ったり寝転んだり、痛みを避けて姿勢を変えるのに時間がかかる。車に乗り込むのも困難で、車に背を向けていちど車外でしゃがんでしまったあとに、頭からゆっくり車内に入っていかないと乗車もできず。妻の付き添いがないと整形外科にも行けなくて三日間くらいは付き添ってもらった。

整形外科にて、骨盤を矯正するというストレッチみたいなのをやつがきもちいい。鍼は、背中を向けていていつ刺さるかわからないのがこわい。足の付け根のところとかにも刺すのだがそれもおっかない。お灸は熱すぎて、事故なんじゃないか、熱いですって言ったほうがいいのか、でも言えずに耐えていると、「はいおわかりました」と言われるのでこれで平常なのだろう。前もこんなに熱かったかな、ど

うだったかな。

先生に「腰とか背中の中の旋回運動をなにかしませんでしたか？」と聞かれたので「ドラムやってます」と答える。「ドラムと長時間の運転が原因かもね。」とのこと。車は燃費のために車高が低めのやつに乗っているし、ドラムも我流なのでフォームが悪く、体に歪みがたまっていたのだろう。先生に「あまり治りが悪いと通勤止めてもらうかもしれない。」と言われて内心よろこんでいたのだが、腕がいい所なので、そのあと快方に向かい、歩いたり寝転んだりは平気になってしまった。久しぶりの出勤はそれはもう憂鬱であった。

十一月某日

早稲田リネンにてライブ。腰にはコルセットを巻いてきた。とにかく本番にあの痛みが再発しないことをいのるばかり。

こんかいはまつむらあきひろ君の企画。まつむら君のデユオと、榎木竜介と図書館、ケバブジョンソンの三組。まつむら君は依然頻繁に共演していて、かなり久しぶりに会ったのだがいい意味で相変わらずで、観て聴いてとても楽しいライブだった。

榎木さんのバンドは初めてみたのだがとてもよかった。

曲がいい。アレンジがいい。ルックスがいい。全部いい。最高。自分らの演奏は、なんか覚えていない。どうだったっけ。腰をかばうのでいっぱいいっぱいだったのかも知らない。

この日はDJを任されていて、終演後もずっと音楽を聴いていた。柵木さんがロー・ボルジスに反応してくれたので、酔っぱらって「今日は一晩中街角クラブを聴こう」とか言っちゃった。柵木バンドのナカジマさんの演奏が特に好きで、彼のユニットSPIROの音源もとても素晴らしかった。

十二月某日

菓子工業組合の仕事で土日の菓子祭りイベントの仕込み。新参者の私にイベント副委員長のお役目を頂戴し、たいへんありがたいのだがなかなかたいへん。真面目に取り組む。

十二月七日

イベント初日。大盛況。大忙し。しかし、なんとこの日に神戸でワンマンライブなのであった。昼過ぎに謝りながら抜ける。新神戸へ。会場はまいどお世話になっていますヘラバラウンジ。リハ前にぎりぎり到着。頭の切り替えが

難しかったが、サウンドチェックしている間に集中力を取り戻す。今年はたくさんライブをやったので、息を合わせるのが容易。メンバーの調子や機嫌や気分もよくわかる。気がする。

演奏前のDJ人の音がめちゃくちゃでかくて、かかっている曲も悪くて最高。2yangさんのマイクパフォーマンスもありで贅沢。

アンコール含めて29曲演奏した。楽しんで演奏できた。2時間強。ワンマンはいつもプレッシャーだったけど、またやりたいな。

終演後はいつものダンスタイム。音楽聴いて踊って飲むのみ。

十二月八日

なんと始発で帰宅してイベント二日目。撤収まで気合をいれて真剣に働く。

とっとり、ひとり、本を作る

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

今年の一月で、無事三十歳になる。(とこの記事を書いているときは、もちろん十二月なのだが。)

二十代の間は目まぐるしかった。今もわからないことばかりだけれども、だんだんと世の中の仕組みがわかってきたし、自分がどうシラけたり、ノったりすべきかバランスを見つけてきているところだと思う。

昨年の終わりから始めたことは本を手放すこと。

趣味は読書ではなく、積読に書きかえなければならぬ。というほどに、本を買い込んでしまう。(読む時間ないですよね?)

移動も多くなり、紙の本でなくてもいいのではという悩みもある。実際、十年前の留学中は電子書籍のお世話になっていて、世界中どこでも日本語で日本の小説や本を読めることに感動した。持ち運びも楽だ。電子書籍のおかげで、日本語力が落ちなかったのかもしれない。ただ装丁にこっている本や書き込んで読み込まないといけないとなると、

紙の本として物体が存在していることの意義は大きいように思う。

くわえて、誰かと共有したり、贈り物として贈ったりするには、物体としてあることが大事になってくる。昔は家族で貸しあっていた本も、電子書籍であれば、アカウントを共有すればいいにしても、難しい。

それにしても、家の中が本だらけだ。

そんなこともあり、sheepsheep books さんと棚を借り始めた。それなりに自分が薦めたい本をおかねばならないし、痛みを伴いつつ、お別れしている。(といっても、月に一回の契約更新で店に寄った際には、また本を買って帰っているのだが。)

他人に本棚を覗かれるような気分でもあり、気恥ずかしい。本棚は自分の一部とも言える。一方で、他の人の棚をみても「これはもしや〇〇さん?」となるので、面白い。個性が立っている。

自分がやっている Podcast「Book Club」の宣伝も兼ねて、泣く泣く人文系の本や、装丁のしっかりした本たちとお別れしている。次のおうちで活躍しますように。

そして、二〇二五年最初に本を作ることにチャレンジ

してみた。

二年前、潰瘍性大腸炎発症に伴って、休職していたとき、湯梨浜のゲストハウス「たみ」で行われたイベント「私のための本のつくりかた」に参加した。いわゆるZINEなどの個人出版の裏話といった内容だった。（そこで、繋がった方達とはご縁が続いているし、直後の定有堂「読む会」で再会した方は、現在「ビオトープ」の小説の読書会で大活躍中である。）

当時服用していたステロイドの副作用か、あるいは自分のメンタルが安定し始めていたからか、「本をつくらう」と覚悟した。それから二年ちかくたってしまったが、『音信不通』も百号をこえて、私の書いた記事が五十記事以上になったこと。ビオトープの仲間たちと広島島の文学フリマに出店することになったこと。自分の自由における棚ができたこと。そして、自分が三十歳になること。いいタイミングだと思い、誕生日に間に合うように入稿を終えた。

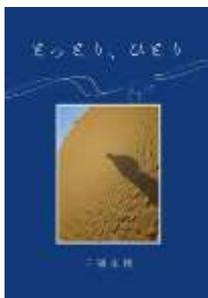
最初は時系列順に記事を抜粋したが、どうにもその季節感に合わせて書いてきた記事なので、つなげるだけではよくわからず、テーマごとに分けるといふ「編集」が必要になった。いや、自分で「編集」ってよくないなと思うし、ましてや校正はできているか甚だ怪しい。とりあえず、

一度目なので、しょうがないししょうがないと言いついて聞かせている。

今回は、私のがんびりやってきたこの五年目に突入した鳥取生活の記録である。まとめてみたら、憂鬱な文章ばかりで笑ってしまった。よく頑張って生きています。

ということで、三浦永理（文・写真）『とっとり、ひとり』二〇二五年一月十三日発行です。もしかしたら、鳥取sheepsheep booksさんの私の棚と二月九日の文学フリマ広島以外でも置くかもしれません。できれば、そちらのほうで。文学フリマ広島では、「らくだのこぶのビオトープ」でお待ちしています。

あらためまして、『音信不通』の記事を使わせていただき、ありがとうございます。



夏肉と骨

あきの素生

(くうねるめがね)



握る指の先が冷たい。冷たい指は心もとなく、小刻みに場所をずらしながら、意味もなく上下を変えながら、何度も握り、指先に力を入れる。あたたかい紅茶の入ったカップにびたりと手を添わせて暖を取り、ぬくもった指で冷たいままの手の甲をさする。キーボードを叩く合間に何度も繰り返す。冬だ。

記憶の中のクリスマスの食卓には、オーブンで焼いた骨付き鶏肉とじゃがいも。鶏肉の皮の表面はきつね色でかりっと、身は溶け出した脂をまとってつやつやしている。かぶりつくと、しっとりとしゅーしゅー、かつポリューミーで、食べ応え十分。じゃがいもは、皮をむいて半分だか四分の一だかに切つてある。ほくほくした中にもどこかしやつきりとしたところがあり、「付け合わせ」の量では食べ足りない。肉もいもも、塩とこしょうのシンプルな味付け。これが定番料理で、毎年の楽しみだった。

骨付き肉には、何とも言えない魅力がある。骨から身をはがさなければならず、ナイフとフォークを使う場合を除いて、食す際には大なり小なり野性味あふれざるを得ないわけだが、それが本能に訴えかけるところがあるのかもしれない。「食べた」という満足感が突出しているように思う。

日常生活でよく食べる骨付き肉は、手羽元だろうか。最近はおつばら酢煮にしている。手羽元に塩とこしょうをなじませておき、卵を茹でる。水と卵を火にかけて、沸騰してから五、六分。半熟の黄身が好みだ。鍋に手羽元をぎゅつと並べ、酒と酢を適当に回しかける。ぽん酢で作るときもある。野菜は、いろいろ試した結果、ごぼうが一番合うんじゃないかと思っている。斜め切りしたごぼうを肉の間に差し込み、鍋にふたをして煮ていく。しばらくすると、ふたのすき間から酸っぱい匂いの湯気がしゅうしゅうと吹き出してくる。開けたふたから熱が逃げて行ってはいけなから、一回お肉をひっくり返すほかは、中の具合を確認したくてもぐつとこらえる。卵は、ぱさぱさりと乾ききらない黄身を目指して、火を止めてから煮汁に浸けている。なので、初日はあまり味が付いていない。でもそれでいい。

この料理を「酸っぱ煮」とか「きっぱり煮」とか呼んでいる。一般的な呼称だと思う。そのまんま、酸っぱくてきっぱりしている。できたてはもちろんおいしい。肉も柔らかい。でも、冷蔵庫で保存して次の日以降に食べる酸っぱ煮がけっこう好きだったりする。卵に味がしみていり、なにより煮ごりができるのだ。レンジであたためたりせず、冷たいまま、煮ごりと食べる。(一)飯にのせてもよし、そうめんや煮ごりを絡めてもよし。酸っぱ煮をいつも大量に作るのは、この煮ごりのためと言ってもいい。買って来た肉を小分けにして、冷凍したり解凍したりするのが面倒くさいからではない。きつと。

骨付き肉が好きな理由のひとつに、「軟骨好き」が挙げられるだろう。あのこりこりとした軟骨が、子どもの頃から大好きだった。歯ごたえのあるものを好んでいて、その界限での最高級品といった位置づけだった。

スペアリブ(豚)も、自分にとつてのごちそう肉だ。生姜や鷹の爪、ローリエと一緒に茹でたスペアリブを、すりおろした玉ねぎ、生姜、ケチャップ、醤油、みりんなどを合わせたたれに漬け込み、オーブンで焼く。少し甘みのあるたれが肉を焦がし、それが旨い。いつ食べると決まったものでもなく、ある日突然やって来る「スペアリブの日」

に大喜びしていたのを思い出す。骨から肉をこそげとり、脂身と一緒にがつんと食べる。軟骨も骨からはがしにかかると、豚の軟骨は鶏と比べてとても硬い。うまく骨から外せたとしても、噛み砕くのにひどく苦労する。負けじと果敢に挑んでいたが、おそらく自分のあごの軟骨をすり減らしていたのではないかと思う。先日行った歯科医院で、昔から硬いものを食べるとよいと言われているけれど、硬すぎるものは顎によくありませんよ、とアドバイスをいただいた。心当たりがありすぎて、曖昧にはほほ笑むしかなかった。

さて、愛してやまない骨付き鶏肉だが、自分ではうまく焼けない。しつとりジューシーを目指すと、中まで火が通っていないことが多いし、しつかり火を通すと身が硬くなる。スパーで見かけるとつい手を伸ばしそうになるが、幾度もの失敗がそれを引き留める。そして、オーブンがなくて、あのシンプルな味付けのとおきおきの鶏肉が作れる方法を調べてみようと思う、のサイクルを何年も繰り返している。二〇二五年の十二月には間に合うだろうか。カウントダウンは始まっている。

ご案内



ドラメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ヒオトープ」

◇ それぞれ会場は とりぎん文化会館

・定有堂教室と太極拳の詳細は左のQRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル(ボルゾイレコード)・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

◇ 太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 ①水曜 19時半から ②土曜 13時半から

◇ それぞれ会場は 市役所 麒麟スクエア



・編集後記:

暇さえあれば、実家周辺の草むらに虫を探しに行っていた(そしてよくお供をさせられていた)姪っ子。幼い頃は中学生になり虫愛する姫君も卒業かと思いきや、今度はヒョウモントカゲモドキ(別名レオパードゲツコー)を飼いはじめたらしい。他にカナヘビもいるらしい。見てかわいいよね!と写真をもらったけれど、粒つぶや密集した水玉の苦手なわたしは、ヒョウ柄がどうにも…。

そのままでもいいよ、自分の「好き」を大事にね。

ドラメリア(編集長)

内田克彦さんの連載が100回となり単行本にまとめられます。推敲作業中。完成までお休みです。

三浦永理さんも単行本化(本文中詳細)。「本屋」さんにも置かせていただける予定だそうです。楽しみですね。

奈良敏行(発行人)